生化学検査より血液疾患を疑い、臨床貢献に繋がった1症例

◎栗山 太郎[1)]、長尾 類[1)]、池谷 均[1)]、田代 菜穂子[1)]、嶌田 喜美恵[1)]、山本 秀巨[1)]
厚木市立病院[1)]

【はじめに】検体検査の業務には、精確で安定した検査データを臨床に提供することの他、パニック値の迅速報告、測定値から推定される臨床により有用な情報を報告するなどがあり診断や治療に貢献している。そのためには、各部門がそれぞれの専門知識を持ち、連携して情報提供することが重要である。今回、生化学検査から血液疾患を疑い、異常値並びに有用な情報を臨床に報告した結果、臨床貢献に繋がった1症例を経験したので報告する。

【症例情報】80代、男性。6ヶ月前に重荷を持った後に、腰痛を発症し近医を受診。鎮痛薬を処方され服用したが改善がみられないため当院の整形外科を受診した。

【検査データ】TP12.1g/dL,ALB2.7g/dLより γ-グロブリンの著増が示唆された。CBCを確認した結果、WBC2.9 *10^3/μL,RBC2.85* 10^6/μL,Hb9.8g/dL, PLT130 *10^3/μLであり汎血球減少を認めた。血液像は検査依頼がなかったが、血液担当者に血液疾患が疑われる旨を伝え、血液像を検査した結果、連銭形成を認めた。

【臨床への報告】本症例には血液疾患の既往歴はなかったため、検査データよりグロブリンが増加する多発性骨髄腫などの、血液疾患の可能性がある旨を担当医に報告した。また残検体の量で実施できる検査項目を提案し、追加検査が依頼された。

【追加検査データ】IgG9002mg/dL,IgA13mg/dL,IgM12mg/dL血清と尿中の免疫電気泳動では、IgG-κ型のM蛋白及びBJP-κ型を認めた。2週間後の再診時に、多発性骨髄腫疑いで血液内科のある他院を紹介され、受診された。

【結語】生化学検査より血液疾患を疑い、血液担当者と連携することで推定疾患、追加検査の提案を行い、これにより早期に他院へ紹介・受診することができた。検体検査は一人の患者に対して多種多様の検査を実施し、多くの結果を報告している。その中で今回、異常な臨床所見の疑いのあるデータを発見した。関連する項目を他部門と連携し精査を行い、臨床にデータの説明や追加検査の提案などを情報提供することの重要性を認識できた。今後も検体検査室からの能動的な活動を通して診断・治療などに貢献ができる検査体制を提唱していきたい。TEL046-221-1570